宮内庁書陵部所蔵の朝鮮活字本

『纂図方論脈決集成』について

吉岡広記 吉岡鍼灸院

【緒言】『纂図方論脈訣集成』は、高陽生の作とされる『王叔和脈訣』の、宋~元初の諸家注を集め

た著者及び撰年未詳の注解書で、後に『東医宝鑑』の撰者である許浚が万歴9年に校正をてがけた脈書である。現存する版本は以下の五種(披見しうるのは①のみ)。

- ①宮内庁書陵部所蔵朝鮮活字本(558函10号)
- ②国立中央研究院歴史語言研究所蔵元至正9年刊本
- ③末松保和蔵整版本(三木によれば覆元本に似るとあるが、②の覆刻本ではない。 元版が別に
- ④中国中医科学院図書館蔵万歴 40 年朝鮮活字本(『中国中医古籍総目』より) 一本あったか)
- 5三木栄蔵万歴 40 年朝鮮活字重刊本

このうち①③⑤の書誌は三木栄『朝鮮医書誌』に、②は阿倍隆一『中国訪書志』に詳しい。本発表では、①宮内庁本について新しく得られた知見を報告する。

なお、許浚の校正を経たものは④と⑤であるが、三木が未校正(中国医書重印本)とする ①も許浚校正本の可能性があり、これについても論及する。

【書誌】「纂図」とあるも図なし。序目なし。巻頭第2~3行に「編輯/校正」とある(⑤は「高陽生編輯/校正」とし、いずれも校正者名を明記せず)。四周単辺(上下双辺も僅かにあり)。撰者注は経文下に小字単行(⑤は双行)、諸家注は低一格単行大字、墨囲陰刻にて「某某曰」と記し(各家毎に改行)、注中の注は小字単行(撰者の校語を含む)、典拠は陰刻す(ままなし)。篇目は低二格で「〇」を冠す。

【篇目】巻一:診脈入式

卷二:五蔵六府、心蔵、肝蔵、腎蔵、肺蔵、脾蔵、左右手診脈

卷三:二十四脈総論七表八裏九道、七表、八裏、九道

参四:診雜病生死候及暴病候、形脈相反、診四時病五行相剋脈、診四時虚実、論傷寒、 諸病生死脈*1、察色観病人生死候、五蔵察色候、診妊婦*2、診妊婦漏胎候、 診妊婦心腹急痛候、診妊婦倒仆損傷、診産難生死候、診妊婦傷寒、小児生死候

*1:5は、この後に「仲景日数脈不時則生悪瘡」を設ける(もとは潔古注。「日」は「日」の誤り)。

*2:5は、診妊婦を欠く。

【引用書】引用は、以下の5種。

通真子:宋‧劉元賓『通真子補注王叔和脈訣』

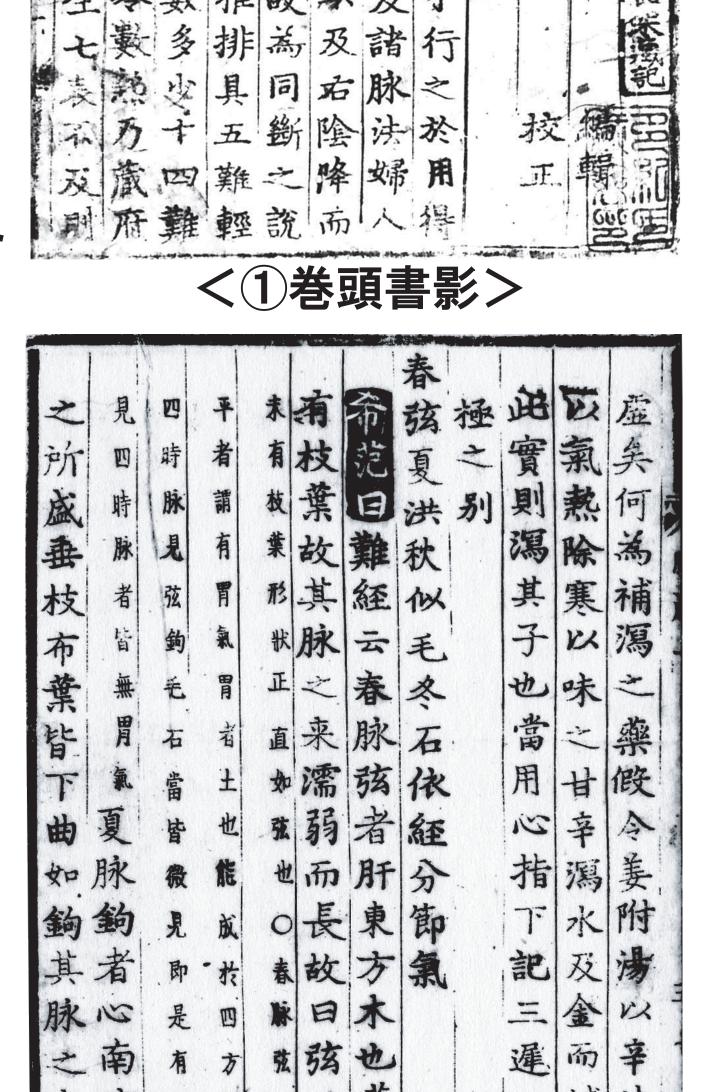
希范:宋・李駧注本(佚、『句解八十一難経』は存)

成無己: 『注解傷寒論』

潔古:金·張元素 [注] 『潔古老人注王叔和脈訣』雲岐子:元·張璧 [述] 『潔古老人注王叔和脈訣』

	巻一	巻二	巻三	巻四	計
通真子	10	24	5	4	43
希范	29	132	69	87	317
成無己	1	0	0	0	1
潔古	33	104	86	86	309
雲岐子	8	4	12	0	24
計	81	264	172	177	694

〈引用一覧表〉



< 1 1巻30丁裏の書影>

中でも潔古注本と並んで引用の45%を占める希范注には、『素問』、『難経』(楊玄操、丁徳用、虞庶注を含む)、無求子(朱肱)、黎(民寿)、池先生(大明)を中心に、『老子』、『霊枢』、仲景、王氏(叔和)、『甲乙経』(玄晏先生)、『病源』、『正理論』、『千金』、杜光庭、『銅人経』、洪、『三因方』(陳無択)、魏、朱、余居士、陳、劉子などが引用され、他の注に比して博引を極める。なお、他の注の全文がほぼ引用されていることから、希范注も同様と考えてよいだろう。

【本書の価値】宋~元初の諸家注を集めた注解書というだけでなく、今は失われた晞范注本の佚文を多く保存する貴重な史料でもある。

【宮内庁本は許浚の校正を経たかということについて】①宮内庁本は、内医院の刊記、序跋、⑤のみにある篇目「仲景日数脈不時則生悪瘡」と巻頭第5行目の「潔古曰」の注「姓張名元素」(注者不明)を欠く点で許浚の校正を受ける前という判断は首肯される一方、巻頭第3行目に「校正」二字を記すため許浚以後の可能性も完全には否定できない。判定には、諸本の実見が必須となる。